

私が携わったプロジェクトで終了後の状況を視察する機会が得られたので、平成26年2月中旬に中国天津市を訪問しました。その時の状況を踏まえプロジェクトのご紹介をしたいと思います。

プロジェクトが実施された検査所は薬品の品質管理、新薬審査の監督検査を行っている法定機関であり、天津港を有することから全国11か所にある輸出入検査所のひとつです。

プロジェクトは1994年から1999年の5年間にかけて行われました。派遣された専門家は延べ90人弱でカウンターパートへの技術協力、中国各地での技術セミナー等が開催されました。日本への研修生は23名で大学、国立衛生試験所（現在の国立医薬品食品衛生研究所）等で約6ヶ月の技術研修が実施されました。私の所ではプロジェクト終了後も引き続き2004年まで研修員の受け入れを行いました。納入された機材は分析機器等で約350点を超えるものになりました。精力的に実施され終了時においては、満足する成果が上がったものと判断されました。

今回は7年前の訪問に次いでのものですが、いろいろの面で7年間の変化の大きさを実感するものでした。話はそれますが、空路北京空港に到着しタクシー乗り場に出た途端に街灯がぼんやりとしていて、目に沁みるような痛みを感じました。喉や肺はマスクをして防げますが、目はなかなか難しく困りました。北京市内までの高速道路周辺はまだまだ農村風景のようですが視界はぼんやり、市内もぼんやり（♪～灯りはぼんやり灯りゃいい～♪の情景とは異質のぼんやり）です。日本のテレビニュースで見るように多くの人がマスクを付けている姿はあまり見かけませんでした。付けているのは外国人か海外からの旅行者のような感じで、恐ろしいことにジョギングする人を多く見かけました。大変な状況だと思います。



現在の天津市薬品検査所

話を元に戻しますが、現在の検査所の写真を見ますと右前の6階建ての円形の建物がプロジェクトを実施した時のものです。ドーナツ型をしていて、外周に沿って試験室、研究室が配置され中心部側に円形に廊下が作られたものです。中心部は吹き抜けになっており、広く見渡せるためカウンターパートとの連絡もスムーズだったことを懐かしく思い出しました。中心にある立派な建物は3年前に自前で建てたものです。1階は事務関連の施設です。2階から12階が試験室、研究室です。最上階は動物舎が置かれていました。4階は所長はじめ管理職の方々の居室です。試験室、研究室は整然として最新の機器類が設置され、試験では有機溶媒を多用することが予想されることから、排気システムも装備され室内環境にも配慮されていました。



実験室

日本で研修を受けた方々の多くが現在も在籍し、指導的な立場に立っておりました。私が担当し日本で研修した方が副所長になり検査所の運営に力を発揮している様子を伺い感慨深く大変うれしく思いました。

技術協力は、一時的には資金を含め物的、人的支援が行われます。プロジェクトが終了した後、その結果をどのように継続し発展させられるか否かは、技術支援を介した人間教育の成果によるものであろう。天津検査所は建物、設備が充実し、試験検査件数も増加したようです。所員のやる気も感じられました。現在実施する試験検査については、十分に対処できていると思われませんが、更なる発展には不安が感じられました。今後は、継続した日本での研修を介して検査技術の向上が図れるような環境整備の必要性を感じました。